

1月25日(火)

広田委員からの提出資料

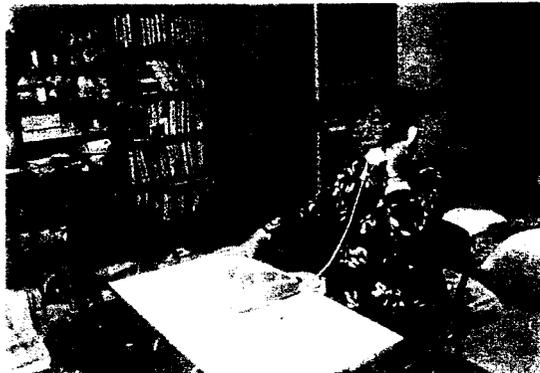


広田氏宅(横浜市南区六ツ川)

広田氏は、横浜市精神障害者住み替え制度を利用して1999年から現在の家に住んでいる。住み始めた頃は母親との2人暮らしだったが、2001年に母親が亡くなって現在は1人暮らし。ホームヘルプサービスを週1回受けている。

グループホームの運営委員も担っている広田氏だが、「精神障害者は地域のなかで、できるだけ“点”となって住むべきだ」という。自分がこの街に住み、日々接するなかで近所の人々の精神障害者に対する理解が進み、さまざまな面でサポートしてくれるようになった。自分が住むことによってこの地域は変わった、いや“変えた”のだという。

広田氏は最近、転倒し足を骨折、車椅子の不自由な生活を余儀なくされた。このとき広田氏を支えたのが近所の人々、そして広田氏を頼り相談に訪れる精神障害者の人々だった。出歩くことがままならない広田氏に代わり「お弁当を買って家に持ってきてくれた」そうだ。普段は広田氏に“支えられている”自分が、逆に広田氏を“支える”ことができた。そのことが相談者自身の大きな自信につながったという。



対談直前に電話相談に答える広田氏

対談前だけでなく対談中にも何度も電話が鳴った。この日はあぐらをかくのは膝が辛いという澤氏を気遣い、部屋の中に折りたたみの椅子とテーブルを用意した。



広田氏宅の居間兼書斎(6畳)

講演依頼などのFAXが次々と舞い込み、ちゃぶ台は原稿や資料が山積み。奥の6畳が寝室。このほか相談者宿泊用に使用している4畳半がある。

六ツ川交番(横浜市南区)前で澤氏と待ち合わせ  
この交番は、広田氏宅を訪ねる人との待ち合わせ場所になっている。



六ツ川商店街のパン屋さん「フリアンド」社長の安田武司氏  
安田氏は広田氏の大事な“地域サポーター”の1人。